

図画工作科

邑井吉治
小西裕一

1 図画工作科の本質について

私たちは図画工作科の本質を次のようなことと考えている。

ものごととの造形的なかかわりを通して 自分の想いを表す喜びを味わい
造形的なよさや美しさへの価値観と創造性を培うこと

色や形などの造形美というものに対して、日常において人は意識をしなくても、いつもかかわりを持っている。例えば、自身の日々のことを振り返ると、ものの様子の美しさに感動したり、好みの色や形でものを選んだりつくったりするのは、日常茶飯事ではないだろうか。社会でも、伝えたいことを色や形を工夫して図に表したり、美しく機能的な製品をつくって提供したり、心に潤いを感じる街並にするために、沿線の造形を工夫したりしている。このように、造形的なよさや美しさを楽しんだり、よさや美しさにもとづいて創出したりすることは、個人の生活にも、人が人と共に生きることに、常に求められていることなのである。したがって、図画工作科では、次の二つのことを培うものととらえる。

一つは「造形的なよさや美しさへの価値観」である。これは、児童期の子どもなりに、対象から造形的なよさや美しさを感じ取ったり、対象をよさや美しさで判断したりするものである。また、造形的なよさや美しさを見たり、取り入れたり、作り出したりすることが、生活を楽しく豊かにすることと認識するものでもある。

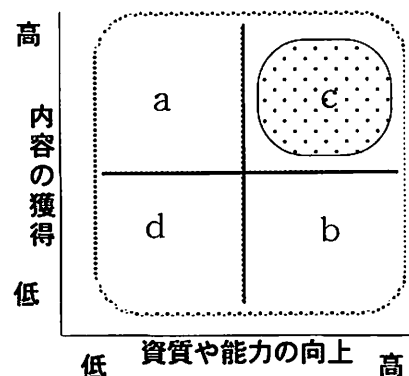
次に、「創造性」である。これは、自分が欲するよさや美しさのあるものを、他者から得るのではなく、自ら発想し考え、それをもとに必要な材料や用具をそろえ、手を働かせて求めるものを得られることである。十分に感覚を働かせ、思考し、それらに連動させて手をよく働かせ、内なる想いを外に表現として自己実現できることである。

以上を培うには、様々なものの特性や美に出会い、触れ試し発見し、様々に失敗し成功する体験の蓄積が重要である。児童期ならではの屈託のない望みや考えと、自己を表現する楽しさや喜びを生かして、意図的に計画的に造形要素における豊かな体験を積めるようにする必要がある。

2 図画工作科の「学び」について

本質にもとづくと、図画工作科の「学び」は造形的な自己表現に取り組み、その過程でよさや美しさを追求することと考えられる。このために必要な資質や能力として、全体論にあるものの他に、造形要素（色、形、構成など）に対する感覚、表現方法を考える思考力や直観力などがあげられる。

資質や能力の向上は内容の獲得によって可能であり、内容は題材として発展的系統的に配列されねばならない。大きく分類すれば、表現（①材料や場所をもとに思い付いたことを表すこと②思いを工夫して絵や立体に表したり工作に表したりすること）と鑑賞（造形のよさに関心をもって見ること）になる。鑑賞は表現に機能的に働くものであり、その内容や設定の時を考慮されねばならない。



3 本質にもとづく基礎・基本について

本質にもとづき、図画工作科で大切にしたい基礎・基本について述べる。

対象から豊かによさや美しさを感じられても、いくら発想を練り上げて念入りな計画を立てても、材料や用具を適切に扱えなければ、作り方が雑然となり、自分が納得できる表現になる可能性は低い。これでは、表現の喜びは得られないであろう。反対に、物を扱う能力がいかに高く

ても、よさの判断や表し方を考えることが不十分であれば、表現の味わいが浅くなり、やはり、納得できる可能性は低い。私たちは、子ども自らが納得できる造形活動ができるためには、最低限これら二つのことが常に重要なキーポイントになると考え、基礎・基本ととらえた。

以上のことから、基礎・基本は、一つは外向的な「つくる力」であり、用具や材料を思いに合わせて使える創造的な技能である。もう一つは内的な「感じたり考えたりする力」であり、よさや美しさを感じたり想いを練ったりつくり方を考えたりできることである。次のようになる。

自分の思いに合わせて材料や用具を扱うことができること
よさや美しさを味わったり表現のしかたを考えたりできること

4 単元を構想するにあたって

図画工作科では、自己の「学び」を深めるということ「自分らしい表現をすること」ととらえる。表現の過程というものは、自分ならではの思いを持ち、その具体的な実現方法を探りながら、またはさらに思いを広げながら表現を進め、徐々に自分の価値観に合う表現へと実現していくものであろう。故に、一つの題材の中でも、個々の感じ方や考えによって様々な表現が生まれ、それにもよって様々な材料や用具が扱われるであろう。そのために、以下に述べる視点にもとづいて単元を構想していく。

(1) 一人一人の題材へのはたらきかけを促す

子どもの造形活動の動機は、つくってみたいという欲求であり、自分が何をつくるかは「切実で楽しい課題」となる。そこで、子どもが題材と出会った時に題材の内容がよく把握できるようにするとともに、互いに発想を話し合ったり試したりできる場に時間的なゆとりをもたせ、多様な表現の可能性や楽しさが実感できるようにする。このことで、自分ならば何をどのようにつくるかを、大まかに見つけ出せるようになることを考える。さらに、表現過程の節々で課題を確かめて、新たな気持ちで表現の方針を定めて進展するように図ることも大切であろう。

また、基礎・基本で述べたように、いくら豊かな思いをもって、材料や用具を適切に扱えなければ、納得できる表現になる可能性は低くなる。そこで、題材にとって重要ならば、材料や用具の扱い方を、子どもの目の前で教師が実際に行き理解させることが必要になることもある。実際に見てとらえることは「百聞は一見にしかず」ばかりか、微妙な扱い方も把握しやすく、それが制作への自信や意欲につながっていくと考えられる。

(2) 一人一人の自分らしさの現れを大切にす

自分らしさは一人一人のひらめきや発想などの思いの現れである。それは主題であったり、表し方であったり、表現に使うものであったり様々である。教師は一人一人の思いに共感を示し、子どもが自分の思いに不安なく、積極的に取り組んでいけるように図りたい。また、教師は今後の指導のために子どもの思いを覚えておくとともに、思いにもとづく活動が円滑に実行できるように、用具・材料や資料などを、一人一人の要望に合わせて提供できる学習環境をつくっておくことが必要であろう。

(3) 自分なりの見方考え方の視野を広げる

自分の好みや考えに合った表現になってきているかを吟味し、今後の指針を立てられるように自己鑑賞の場を適宜設ける。また、友だちとの相互鑑賞の場を適宜設けることで、友だちの作品から、自分には思いつかなかった表現方法に気づき、表現の可能性への見方考え方を広げられるようにする。このような表現途中での鑑賞は、より納得できる表現への足がかりとなり、次の段階への意欲につながるであろう。一人一人の追求を大切にしたい。

(4) 子ども自身の変容の自覚を促す

「新たな自分 自信のもてる自分」の感得は、自分らしい表現をしたよさを味わうことと考える。それは、思いの自己実現である表現の経緯を振り返り、表現に注ぎ込んだ数々の考えや努力を再認識し活動に納得することである。そのためには、表現過程で何回か題名を練ったり制作メモをしたり、完成時に自分の思いを他者にアピールするものをつくることなどが考えられる。これらの中で、よさの認識や活動の成就感、あるいは作品への愛着を高めらるであろう。

また、同じ題材でも、自分と異なる表現が様々な存在することの認識は、一人一人が自分らしい表現をすることのよさに浸ることができるであろう。共に生きることのすばらしさの感得につながると考える。

5 実践例 -1年-

(1) 題材名 くしゃくしゃがみから

- (2) 目標 ・紙を大きくちぎったものを、しっかりのりづけすることができる。
 ・みつけた形を何かに見立てて想いを広げ、楽しい様子を表すことができる。

(3) 指導にあたって

本題材の基礎・基本について

本題材は、新聞紙を任意の形にちぎってできた形からさまざまな生き物（動物など）を発想し見立てた形に対して自分の想いをもとに描き加えていくというものである。ここでは予め自分のつくりたい形を想像してちぎっていくのではなく、意図を排除してちぎって生まれた形（＝偶然生まれた形）から見立て遊びを行い、その中で自分が気に入ったものについてパスで加筆しながら表現活動を行っていく。

子ども達は線などのガイドなしで手で紙をちぎっていく作業は小学校においては初めてである。紙をくしゃくしゃにしたり、ビリビリとちぎったりしながら紙のもつ感触を味わい、そのおもしろさや紙のもつ特徴について楽しく経験するであろう。さらに、ちぎってできた形から動物など様々な具象物を想像する見立て遊びをしながら、発想活動を活発に行うとともに、思いついたものを、どこにどのように描き加えていくか構想することも重要な経験となる。

また、ていねいにのりづけすること、クレパスで面塗りをすることなどは先の題材で経験しているが、本題材を通してより定着を図りたいと考えている。

そこで、本題材における基礎基本を次のようにとらえた。

<つくる力の面>

- …内容に関わるもの
- ・ていねいにしっかりと のりづけすることができる
- ・パスの面塗りをきちんと行うことができる

<感じたり考えたりする力の面>

- …資質、能力に関わるもの
- ・ちぎった形を何かに見立てて 楽しく想像することができる

のりは液状やスティック状のものではなく、でんぷんのりを使うことにする。のりづけに関しては、指を使って特に周辺部にていねいにのりを塗り、はがれが出ないようにしっかりと貼りつけられるようにしたいと考えている。

また、クレパスで描き加える際、面塗りをするときにはパスの先を回転させて塗るよう再度指導し、習熟をはかりたいと考えている。

新聞紙を任意の形にちぎっていき偶然できた形から発想して、別の具象物に見立てていく際、一つの見方に固執せず、形を回してみたり、部分に注目したりすることでいろいろなものに見えるおもしろさを味わえるようにしたい。

単元計画 （総時数 4時間）

主 な 活 動 と 内 容	学びを深めるために
1 新聞紙を手で無作為にちぎる遊びをする	①
2 ちぎってできたかたちから 見立て遊びをする	①②
<ul style="list-style-type: none"> ・回したり 部分に注目したりして 次々と発想を行っていく ・思いついた生き物の名前をワークシートに書いていく ・思いついたものの中から気に入ったものを選び 台紙にのりでていねいに貼りつけ 初めの題名をつける 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">どうぶつとあそんでいるじぶんをかこう</div>	
3 自分の見立てたものの特徴がよく表れるよう 台紙に自由にクレパスで絵を描き加える	①③
<ul style="list-style-type: none"> ・貼りつけた形の周りに描き加えたものに 色を塗る 	
4 ミニ鑑賞会を開き お互いのよさ美しさを 味わいながら感想を言い合う	④
<ul style="list-style-type: none"> ・できた作品に最終的な題名をつける 	

学びを深めるために

① 一人一人の題材へのはたらきかけを促す

新聞紙をちぎる作業は子どもにとって楽しい活動であると考えられるとともに、ちぎることで偶然生まれた形から、見立て遊びをしながら発想する活動を楽しむであろう。ここでは、「ちぎる」「見立てる」「絵を描き加える」という3段階のステップにより、遊びから表現へと発展していくことを期待している。そのため、どんなものをつくるかは初め伏せておき、ちぎる際に何かの形にしようという意図が入らないように留意したい。紙に触れる楽しさを実感した後、新聞紙の形の生き物と、絵の中で遊んでいる自分を表したいという動機をもって表現活動が始まるよう、促したい。

② 一人一人の自分らしさの現れを大切にす

初発のひらめきをもとに、それを具体化していくための活動を大切にしたい。形を回転させたり、部分に注目したりしながら見立て遊びを行い、思いついた生き物をワークシートに書き留めていく。その中から自分の選んだものをもとにこれから描く絵に題名をつけ、表現の出発点とする。形に手足を描き加えたり、背景に必要なものを描く際に途中でひらめいたことなどを試しながらよりよいものへと向かう姿勢を大切にしたい。

③ 自分なりの見方考え方の視野を広げる

制作の途中段階で、自分の表したいものになっているかどうか（題名通りになってきているかどうか）ふりかえる場をもつことで、次の活動へのめあてをもったり、表現への意欲を高めたりすることが期待される。また、見立て遊びの中で、自ら新しい見方を次々と発見したり、友だちとの交流を通じてさらに新しい見方を発見したりして視野が広がるとともに、考えや表現を互いに認め合うことで追求意欲がさらに向上すると考えた。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

自分の作品が題名通りになってきたと自覚したり、表現が自分の納得できるものになったと思えたときに、成就感を味わったり、自分のしてきたことに自信がもてるのではないかと考えた。具体的には、表現の出発点で初めの題名をつけ、完成時に最終的な題名をつけることで、題名らしくなってきたと自覚したり、したかったことができたと思えるかどうかふりかえることで、子ども自身の変容の自覚が促されると考えた。

(4) 本単元における授業の実際と考察

本題材における子どもの変容を追っていくうえで、着目したい場面は3カ所ある。それは、

- ① ちぎった新聞紙の形から見立て遊びをして、思いついたものを書く場面（表現のはじまり）
- ② 思いついたものの中から気に入ったものを選び、初めの題名をつける場面（主題の方向性）
- ③ できた作品に最終的な題名をつける場面（主題、表現の展開を自覚）

である。これらは、発想→選択→追求の3つの段階においてどのような子どもの変容が見られたかを観察するのに適していると思われるポイントであり、これらに沿って考察を行っていく。

本題材に入る前に、子どもの意識と思考の傾向を探るために2つの実験的な活動を行った。

まず1つ目は新聞紙を使った紙を裂いたり、ちぎったりする体験である。教師側から特に作り方の指導をせずに子どもに紙をちぎる活動をさせた場合、どのようなちぎり方やちぎる大きさの単位が見られるかを見るのが目的であった。ここでわかったのは、新聞紙をそのまま裂いたのでは、繊維の方向に強く影響を受けるために、子どもが裂くと方向性が決まってしまう細長い帯状のものになりやすいこと、くしゃくしゃにしてからちぎっても、ちぎれた形からの見立てはほとんど行われず、裂いた紙は工作の材料のように扱われることが多いこと、すなわち、意図的にちぎったり、丸めたりすることなどが多く見られたことである。具体的には子どもの中から生み出されたものの多くは立体的なものであったり、衣服や武器のように身につけるものであった。このこ



ビリビリビリ・・・ってちぎったら

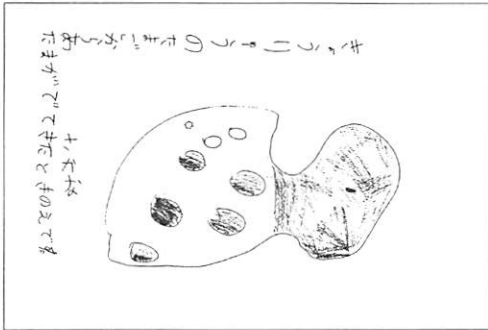
とから、ちぎった新聞紙から見立てを行う際には、ちぎり方や見立てることに対しておもしろさを感じられるようにする必要があったと感じた。

2つ目に行ったのは画用紙に1本の線だけで任意の形を描き、生まれた不定形から意味のある何かを想像し、思いついたものについて特徴がよく表れるよう、描き加える活動である。ただ、この段階で深追いすると、本題材に入った際に新鮮さが失われるおそれがあったので、この活動では、子どもにとっては見立て遊びの練習的なものになる程度に留めた。

事前調査の結果から、次に挙げる点によって抽出児を選び出した。発想を広げるよりも思いついたものについて深く追求しようとするタイプとなるべく多くのものを発想しようとするタイプである。本考察では一人ずつを選んで考察を行っていく。

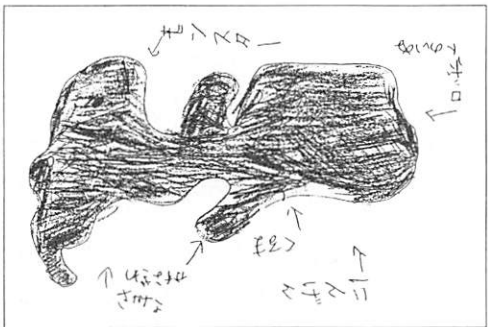
① ちぎった新聞紙の形から見立て遊びをして、思いついたものを書く場面（表現のはじまり）

S児は事前調査では発想が漠然とした単純なものではなく、表し方がくわしく具体的であったのが特徴的である。ほとんどの子が「とかげ」「うさぎ」など単語だけで終わっているうえに、種類もそれほど多くなく、見る方向も固定的なのに対して、見立てられた数こそ少ないが「きょうりゅうのたまごからあたまがでてきた」という表し方に表れているように見立て方が複合的であり、しかももう一つの見方が「さかな」なのだが、見る方向を変えているのである。



S児の作品

Y児は不定形をさらに様々な角度から見ており、合計で六箇所もの見方をしているがその表現は「にんげん」「かなざわ」「くるま」「さかな」「モンスター」「ロボットのいぬ」など直感的かつ単純である。このことからS児は一つものについて多くの発想を行うことよりも思いついたものについて深く練り上げていくことを好むと言えY児は見立て遊びそのものを広げて楽しんでいることがうかがえる。



Y児の作品

以上のことをふまえて本題材における見立て遊びを行った結果、以下のような事象が見られた。

S児の場合；事前調査で見立てられた数が2種であったように、実際の授業の見立ての活動においても1つの形からはそれほど多くの種類は発想できなかったようである。また、部分に注目する見方は変わっていないが言葉による表現は単語のみの単純なものになった。ここでこの子が考えたのはちぎった形を複数用意し、それぞれについて発想を行うことであったようである。それは、ワークシートその1においてちぎった形3つについて思いついたものを書いてきたことからわかる。特筆すべきは、そのうちの1つの形を「いるか」と「くじら」に見立てていたのだが、これは同じ紙を左右反転させて見るものなのである。2つ目以降の見立てを思いついても、同じ向きで見ることから離れられない子が多かっただけに、S児の見方は周りの子にも影響を与えたようである。



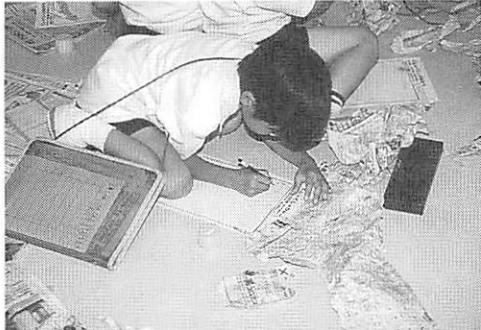
こうすると「いるか」に見えるし

全体的に事前調査と異なっていたのは、思いついた形についてあまり説明的なものは登場せず、ごく単純なものが多かったことである。線で不定形を描くのに対して、新聞紙をちぎった場合は、それほど複雑な形にはならないことが多く、そのためにこのような結果になったのかもしれない。この後、見立てた形をもとに自分の表したいものになるよう、貼り方を考えて画用紙に貼っていくのだが、S児はちぎった形ひとつだけではなく、いくつかを組み合わせ



こうすれば「くじら」に見える

でもよいかと質問してきた。1つの形で作品をつくらないといけないと思っていた子にとっては複数組み合わせるといふ発想は新鮮だったようでこの質問の後、追加するものをつくるべく新聞紙をちぎる子の姿が多く見られた。ただ、予め形を想定してちぎると、作品の偶然性のおもしろさが失われてしまうので、そうならないように配慮したつもりであったが、ごく一部の子に関しては意図してちぎったのではないかと思われるものも見られた。題材設定上のねらい通りではないとはいっても、自分の作品についての思い入れ故のものであり、絵の中の最も大切な部分を補足するものだったため、その行為を認めたが、なかなか判断の難しいところであろう。



えーっと、思いついたのは・・・

Y児の場合；Y児は新聞紙を帯状に裂き、細長い形状にこだわっていたようである。ちぎるのをやり直すことも十分可能だったはずだが、彼なりに考えがあったのかもしれない。「いのしし」「くじら」「さかみち」「しんかんせん」「へび」と発想は生き物にとどまらず、彼の好きな乗り物にまで発想が及んできたのだが、ここまでで共通して言えるのはすべて形を横にして見たものであるということである。この後、Y児は紙を縦にして見立てることを思いつく。そして、出てきたのは「とうきょうタワー」であった。が、その後縦位置は続かず、また横位置に戻して次に出てきたのは「やま」「スポーツカー」であった。他の子

を見ても1つの形について2つ3つと思いつく子が多く、1つの見方にこだわらずに豊かな発想をする意欲的な姿が見られた。

学びを深めるためにとの関連

一人一人の題材へのはたらきかけを促す

新聞紙をちぎる活動と見立て遊びをする場を設けたのだが、ちぎること自体が子どもにとって楽しい活動になったとともに、ちぎることで偶然生まれた形から発想する活動も十分に楽しんでいたようである。ここでは、「ちぎる」「見立てる」「絵を描き加える」という3段階のステップにより、遊びから表現へと発展していくことを期待していたのだが、子ども達は積極的に自分のつくりたいもの、描きたいものを表現しようとしていた。

見立てにおいて偶然性のおもしろさを生かしたかったので、ちぎる際に何かの形にしようという意図が入らないように留意した。そのためちぎる際の意識は概ねこちらのねらい通りだったが新聞紙の裂け方の方向性は、いかに繊維をくしゃくしゃにしたといってもなかなか消すことができず、帯状になりがちなため「ちぎり始めた所にもどってくるように少しずつちぎっていく」という指導を行うことでようやくうまく抽象形ができるようになった。また、見立てを行う際、部分に注目して見ることは多く見られたのに比して、回転させて方向を変えて見るという意識付けがやや弱かったようだが、子ども達は1つの形からたくさんものを見つけたことの楽しさを実感していたようである。



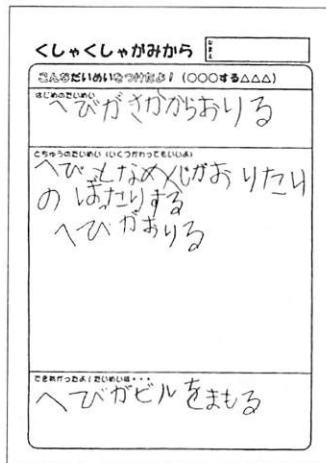
ワークシート1

一人一人の自分らしさの現れを大切にする

形を回転させたり、部分に注目したりしながら見立て遊びを行い、思いついた生き物を書き留めていくためのワークシートを用意した。ワークシートは作品の制作上、必要と思われる段階で書き、その後の制作を続けていくのに役立つように作成した。よって自分の考えを確かめながらつくるうえで参考になったと考えられる。

② 思いついたものの中から気に入ったものを選び、題名をつける場面（主題の方向性）

S児の場合；「いるか」と「くじら」で迷っていたようだが、「いるか」のほうが気に入らしい。メインは「いるか」に決まったのだが、それだけでは不足と感じたらしく、他の子では1つだけでいく場合も多かったのだが、彼女の場合、合計4種類の紙片を用いていた。見立ての段階で既に思いついていた「いのしし」「ろけつと」に加えて「さかな」も登場させていた。題名を決める際に「〇〇する◇◇◇」というように、何かをしていることがわかるようにするといひ、ということを知らせたのだが、彼女の考えた初めの題名は「うみのいきもの」という、ごくシンプルなものであった。メインになるものが「いるか」になるにしろ「くじら」になるにしろ



ワークシート2

どちらも海の生き物であったことが題名に影響を与えたのかもしれない。ただ、その後のワークシート上の『とちゅうのだいめい』の項目では「いるかとりけつとといのししとさかな」に変わっており、海の生き物以外に発想が広がっていったことがわかる。

Y児の場合；登場するのは2ひきの生き物とビルディングである。「へび」「かたつむり」「ビル」が登場するのだが、共通するのは細長いものであることである。ここで彼の付けた初めの題名は「へびがさかからおりる」であり、初発の「へび」にこだわりを持っていたらしいことと、題名自体が登場する生き物の様子をストレートに表していることがわかる。

学びを深めるためにとの関連

一人一人の自分らしさの現れを大切にす

思いついた生き物をワークシートに書き留めていった後その中から自分の選んだものをもとにこれから描こうとする絵に題名をつけ、表現の出発点となるようにした。形に手足を描き加えたり、背景に必要なものを描く際に途中でひらめいたことなどを試しながらよりよいものへと向かう姿勢を大切にしたいと考えて指導を行った。絵の中には一緒に遊んでいる自分も入れると楽しい、ということも知らせたのだがこれは自分を入れることで登場する生き物が身近に感じられるのではないかと考えたのと、このことで遊び方をもとに、動作や背景への思いが広がっていくだろうと考えたからである。自分を入れたかどうかには個人差があり、自分を登場させた子もいれば、出てくる動物そのものに自分を投影している子もいたようである。S児は画面上に自分を登場させ、出てくる生き物と共存する世界を構築した。Y児は出てくるへびが自分の分身ともいえる存在のようである。他の子の作品を見てみると、自分が登場しないものであっても、思い入れの強いものが登場していると言える。

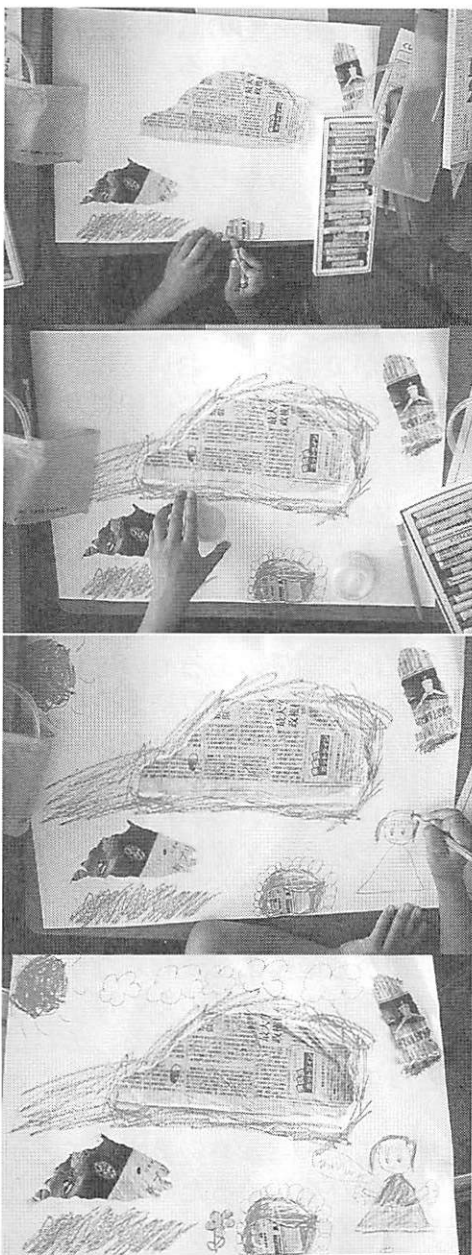
③ できた作品に最終的な題名をつける場面

(主題、表現の展開を自覚)

S児の場合；「うみのさかな」→「いるかとりけつとといのししとさかな」→「いるかとりけつとといのししとさかな」となり、最終的には登場する生き物すべてが題名になるという結果に落ち着いた。完成後の作品鑑賞会に向けてのワークシート上の『友だちに伝えたいこと』中の『なにをしているところですか？』では「いるかはおよいでいる・いのししがはしっている・りけつとがとんでいる・さかながおよぐ」とあり、それぞれの生き物が様々な動きをしているのに対してそれを眺めている「自分」がいる作品に仕上がっている。

Y児の場合；「へびがさかからおりる」→「へびとなめくじがおりたり のぼったりする」→「へびがおりる」→「へびがビルをまもる」と題名が変化していったのだが、興味深いのは作品鑑賞会向けワークシートでの『友だちに伝えたいこと』中の『でてくるいきものは？』を見ると、へびと一緒に登場するのは、「なめくじ」ではなく「かたつむり」になっているところである。実際制作中の作品の変化を見てみると、初めはやはりなめくじのようである。

しかし、ビルを描き終えた後、うずまきのような描写を加えて完成となっているのである。どのような理由で彼がなめくじをかたつむりに変えたのかはわからないが、制作途中で思いついたこ



完成までの制作の流れ (S児)

とを大切に、彼自身が当初の考えを変更したのは確かである。

学びを深めるためにとの関連

子ども自身の変容の自覚を促す

自分の作品が題名通りになってきたと自覚したり、表現が自分の納得できるものになったと思えたときに、成就感を味わったり、自分のしてきたことに自信がもてるのではないかと考えた。よって、表現の出発点で初めの題名をつけ、完成時に最終的な題名をつけることで、題名らしくなってきたと自覚したり、したかったことができたと思えるかどうかふりかえることで、子ども自身の変容の自覚が促されると考えたのだが、ワークシート上で見る限り、つけた題名に変遷が見られたことから、子どもの意識の中に題名がこのままでよいかどうか、途中段階でふりかえる場があったことがうかがえる。短時間での制作であったが、子どもの意識を観察する上で十分に有効な手だてであったと考えられる。

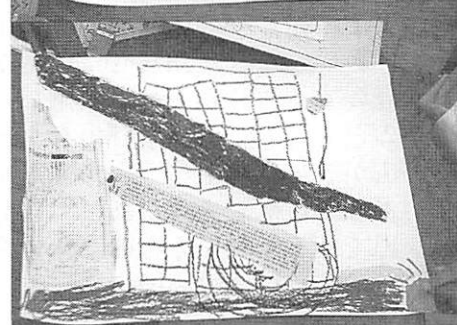
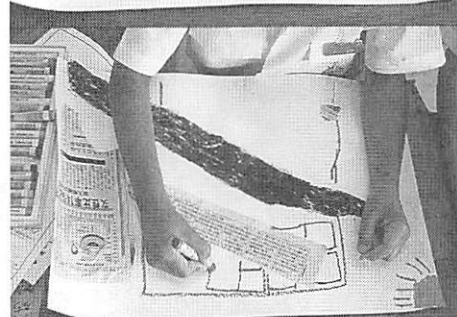
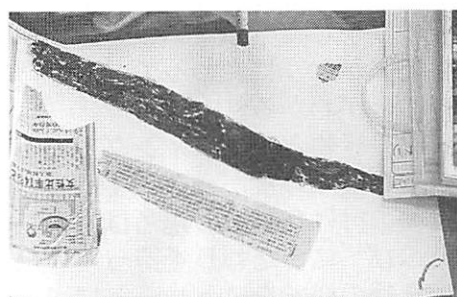
基礎・基本との関連

<つくる力の面>「ていねいにしっかりとのりづけすることができる」と、「バスの面塗りをきちんと行うことができる」は既習の題材を受けて、本題材ではさらに定着・習熟が進んだことが子どもの様子からうかがえた。

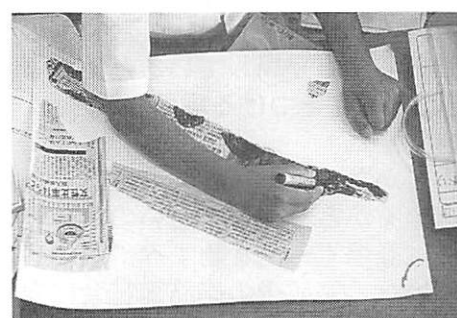
<感じたり考えたりする力の面>「ちぎった形を何かに見立てて 楽しく想像することができる」においては、どの子どもそれぞれ「自分らしい表現をする」ことに夢中になり、表したい思いを次々と発展させていったことが十分にうかがえた。

S児はちぎった形からの発想はそれほど多くはなかったが偶然生まれた形から思いついた素直な思いを大切に表現を続けていった。それは、最初の発想が「いるか」か「くじら」で、題名もいったんは「海の生き物」にしようと考えたのに、その後の発想を無理に海に関係のあるものにしようとはせず、「いのしし」や「ろけっと」のように素直に思いついたものについて表現していったことからもうかがえる。このため題名をつけようとするのは難しくなったが、彼女にとっては題名にしばられずに自分の思いついたことをそのまま表すことが喜びであったのだろう。Y児はとにかく発想が豊富で、様々な見方をしようとして一生懸命だったことがよく伝わってきた。彼はへびについてこだわりがあったようで、へびが主人公であることは最初から最後まで変わらなかった。よって表現はへびを中心に展開しへび以外のものは、制作途中に彼自身の思いから何度となく変更されている。それは題名からもうかがえ、彼にとって自分らしい表現だったことがよくわかる。

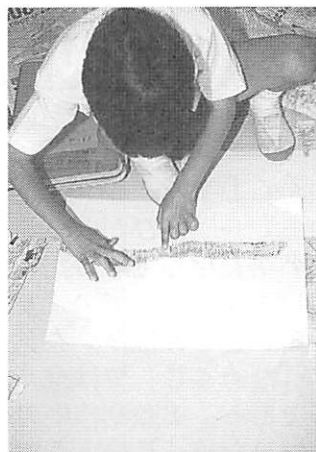
以上のことから、本題材の基礎・基本を獲得することができたと考えられるとともに、学びを深めるために構想した①～④の手だては妥当であったと考えられる。



完成までの制作の流れ (Y児)



面塗りはていねいに



のりづけはしっかりと